# ごみ分別 人工知能スマホアプリ作成手順 (概略)

2018/11/06 Rev. D

# 作業の流れ

- データセット準備 p.3
  - 画像収集
  - 画像水増し Ralpha
  - 画像アノテーション labelImg
    - Yolo-img-x28\_windows.py

- labelImg 分類結果一括修正 p.4
  - replace\_classid.sh
- データセットのチェック p.5
  - filecheck.py
- 学習用とテスト用画像振分け p.6
  - process2.py

#### 前処理

#### 学習

#### モデル検証

#### モデル変換

#### 後処理

- 設定ファイル編集 p.7-8
  - 手作業

- · darknet 学習 p.9
  - darknet-train.sh

- ログの確認 p.10-12
  - Loss(損失)の収集
  - Loss(損失)のグラフ作成
    - darknet-log\_grep.sh
    - 手作業

- mAP計測 p.13
  - darknet-map.sh
- mAP計測結果編集 p.14
  - darknet-map\_grep.sh
- mAPグラフ作成 p.15-16
  - 手作業
- darkflow モデル変換 p.17-18
  - darkflow-flow.sh
- .weightsファイル削除 p.19
  - darknet-rm\_100weights.sh
- スマホ p.20
- 参考 p.21

## データセットの準備

- ごみの撮影
  - ごみを撮影し、撮影した画像ファイル(\*.jpg)をごみの名前が付いたフォルダーに保存する
- リサイズ~水増し
  - Ralphaを使って画像を500x500位にリサイズ、水増しする
  - Yolo-img-x28\_windows.py を使えば水増しの作業は不要
- バウンディング・ボックスの作成(アノテーション)
  - labelimg を使って、アノテーションを行う
  - 撮影分のみアノテーション後は、Yolo-img-x28\_windows.py を使い、 画像の水増しとアノテーションファイルの自動生成が可能
- ・ 画像の集約
  - 学習は、すべての画像をまとめて学習するため、各担当が撮影した画像ファイルとアノテーションファイルを1つのフォルダーに集約する
  - 具体的には、すべてのフォルダーから学習する画像ファイルとアノ テーションファイルを、~/darknet/data/all フォルダーにコピーする

# labelImg 分類結果一括修正 replace classid.sh

#### Purpose:

- アノテーション時に<mark>分類番号を間違えたとき</mark>、生成したテキストファイルの先頭1文字(間違っている分類番号)を正しい分類番号に置き換える
- 但し、分類番号は、0~9まで

- \$./replace\_classid.sh <フォルダ名> <ファイル名> <変更後の分類番号>
- <ファイル名>は、<ファイル名>で始まる.txtファイル
- 例
- \$ ./replace\_classid.sh data/2nd cell 2
  - ・ 以下を実行する
  - \$ sed -i -e 's/^. /'\$NEW\_CLASSID' /g' \$FOLDER'/'\$FILE\*.txt



# データセットのチェック filecheck.py

#### Commentary:

- データセットは、画像ファイル(\*.jpg)とアノテーションファイル(\*.txt)のセットが必要
- 学習中に、片方が無い場合、エラーが出て手戻りになるので、学習前に、filecheck.pyを使って、画像ファイル(\*.jpg)とアノテーションファイル(\*.txt)のペアの存在をチェックしておく

#### Purpose:

- 画像ファイルとアノテーションファイルのペアが存在するかチェックする

### Usage:

- \$ python filecheck.py <フォルダ名>

## 画像とアノテーションファイルの水増し

## Yolo-img-x28\_windows.py

#### Procedure:

- 画像の撮影を終えたあとは、手作業でアノテーションを実施する
- 水増しの前に、画像のExif情報を読み取り、「向き」の方向に回転して から、Exif情報を削除する(回転後の画像を基本画像とする)
- 基本画像を、4方向に回転(×4倍)した後、各種画像変換(×6種)を 行い、基本画像を24倍に水増しする
- 同時に基本画像のアノテーションファイルも24倍に水増しする

- \$ python yolo-img-x28\_windows.py <image folder>
  - classes.txt があるとエラーが出て途中でやめるので移動しておくこと
- 例
- \$ python yolo-img-x28\_windows.py data/2nd

## 学習用画像とテスト用画像を振り分ける

## process2.py

#### Purpose:

学習用画像(90%)、テスト用画像(10%)に振り分けて、それぞれのリストを作成する

#### • Usage:

- 引数でフォルダ名とテストする割合を指定する
  - \$ python process2.py <image folder> <ratio of test(%)>
  - \$ cd ~/darknet
  - \$ python process2.py data/2nd 10
  - (注意) データセットを GPUマシンにコピーしてから実行するか、GPUマシンと同じフォルダ名の 別のPCで実行しないと、学習時に正しいフォルダ名がみつからず、エラーになる

#### Output:

- test.txtとtrain.txtが、darknetフォルダにできるので、data/2nd へ移動 する
  - 例
  - test.txt: 440行、train.txt: 3960行、合計: 4402個

## darknet設定ファイルの作成/編集 (1/2) 手作業

- ~/darknet/cfg にあるフォルダを流用コピーして新しいフォルダを作成する
  - 例
  - \$ cd ~/darknet/cfg
  - \$ cp all all2
- \*.data を編集する
  - 例: 分類数=10の場合の all2.data
  - classes = 10
  - train = data/all2/train.txt
  - valid = data/all2/test.txt
  - names = cfg/all2/all2.names
  - backup = backup

## darknet設定ファイルの作成/編集 (2/2) 手作業

- \*.names を編集する
  - 例: all2.names
  - 分類名を列挙する
- \*.cfg を編集する (tiny-yolo の場合)
  - 例: all2.cfg
  - 125行目: classes = 10
  - 119行目: filters= 75
    - filters = (classes + 5) \* 5

## darknet 学習 darknet-train.sh

#### Purpose:

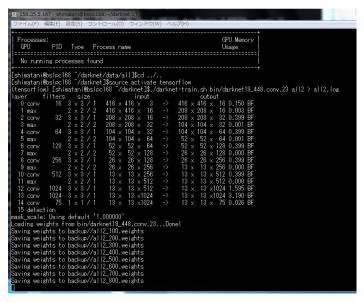
 darknet(YOLO)が提供している事前学習済み重み係数モデル (darknet19\_448.conv.23.weights)\*1を使って学習する

- \$./darknet-train.sh <事前学習済みモデルファイル名> <作成するモデル名>
- 例
- \$ ./darknet-train.sh bin/darknet19\_448.conv.23 all > all2-train.log
- \*1学習済みの重み係数モデルを用いて、繰り返し新たな学習を行う転移学習方法が、かば焼きや串カツに使われる秘伝のたれの再利用方法に似ている。ここから、この方法により学習を重ねた重み係数モデルを秘伝のたれと呼び、この方法による転移学習方法を秘伝のたれ学習法と名付けたが、評価の結果、繰り返し学習されるごみが過学習になる懸念があったため、この方法ではなく、darknetが提供するモデルを利用することにした。

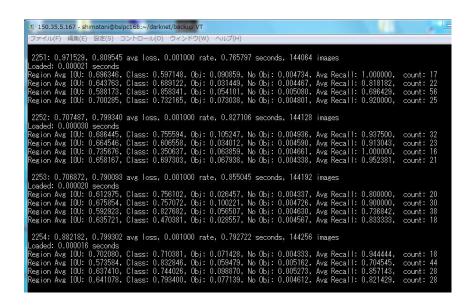
## Loss(損失)の収集

#### Commentary:

- 学習中のLossをグラフ化するために、画面出力をログファイルに落とす
- 学習中の画面をリダイレクトすると画面がスクロールしなくなるので、 ターミナルをもう一つ開いて、tail コマンドで表示する
  - \$./darknet-train.sh bin/darknet19\_448.conv.23 all > all2-train.log
  - \$ tail -f backup/all2-train.log



学習コマンド実行中画面



ログ収集中画面



## Lossの収集~グラフ作成

## darknet-log\_grep.sh

#### Purpose:

エクセルでのグラフ化を容易にするために、logファイルから、loss を 含む行だけを抜き出したテキストファイルを作成する

#### Usage:

- \$./darknet-log\_grep.sh <生成された.weighs 保存フォルダ名>
- 例
- ./darknet-log\_grep.sh all2/all2

#### Function:

- ファイル backup/all2-train.log を開き、all2-train-A.txt を出力する
- darknet-train.sh は、学習終了後にweightsファイルとlogファイルをbackup/\$TRIAL に移動しているので、<生成された .weighs 保存フォルダ名>は、backup以下のプロジェクト名になる



# Lossの収集~グラフ作成 手作業

- Purpose:
  - エクセルを使い、loss計測結果をグラフ化する
- Procedure:
  - all2-train-A.txt をエクセルで開く
  - 元データの形式:
    - のカンマやタブの区切り文字・・・ を選択
  - 次へ
    - □カンマ をチェック
    - □スペース をチェック
    - ロその他 をチェックして、":"を入力
    - ・ 口連続した区切り文字は1文字として扱う をチェック



## mAP 計測 darknet-map.sh

#### Purpose:

- .weightsファイルからmAPを計測する
- 計測結果は、mAP 計測結果編集スクリプト darknet-map\_grep.sh を 使って見える化する

- \$./darknet-map.sh <モデル名>
- 例
- \$ ./darknet-map.sh pp4



# mAP 計測結果編集 darknet-map\_grep.sh

#### Purpose:

- mapファイルからグラフ表示に必要な行だけを抜き出す
- darknetが出力するファイルに、CRLFが含まれるので、これをLFに置き 換える

- \$./darknet-map\_grep.sh <モデル名>
- 例
- \$ ./darknet-map\_grep.sh pp4



## mAPグラフ作成 (1/2) 手作業

- Purpose:
  - エクセルを使って、mAP計測結果をグラフ化する
- Procedure:
  - \*-map\_result-B.txt をエクセルで編集しグラフ化する
  - 元データの形式:
    - のカンマやタブの区切り文字・・・ を選択
  - 次へ
    - □カンマに、チェック
    - □その他に、=入力



## mAPグラフ作成 (2/2) 手作業

### - ファイルを開く

- 例
- A列をall2\_\*でフィルタリング
- A列をコピーして、A列の最終行以下に貼り付け
- A列をmean\_averageでフィルタリング
- B列をコピーして、B列の最終行以下(A列貼り付けの右)に貼り付け
- C列をprecisionでフィルタリング
- D列をコピーして、C列の最終行以下(B列貼り付けの右)に貼り付け
- F列(recall)をコピーして、D列の最終行以下(C列貼り付けの右)に 貼り付け
- H列(F1-score)をコピーして、E列の最終行以下(D列貼り付けの右)に貼り付け



## darkflow モデル変換 (1/2) darkflow-flow.sh

- Purpose:
  - .weightsファイルを.pbファイルに変換する
- Usage:
  - \$./darkflow-flow.sh <モデル名>
  - 例
  - \$ cd ../darkflow
  - \$ ./darkflow-flow.sh all2
- Post procedure:
  - WinSCPを使って、tiny-yolo-voc-graph.pbモデルを、
    G:\(\frac{4}{2}\)Android\(\frac{4}{2}\)Project\(\frac{4}{2}\)garbage\(\frac{4}{2}\)assets\(\frac{4}{2}\)tiny-yolo-voc-graph.pb にダウンロードする



## darkflow モデル変換 (2/2)

### darkflow-flow.sh

#### Function:

- (1/9) カレントディレクトリを darkflow に変更
- (2/9) darkflowフォルダにプロジェクトフォルダを作成
- (3/9) \* final.weights ファイルを、darkflow/binフォルダにコピー
- (4/9)ファイル名を、yolov2-tiny-voc.weights に変更
- (5/9) darknetの.cfgファイルをdarkflowにコピー
- (6/9) darknetの.namesファイルをdarkflowのlabels.txtにコピー
- (7/9).weightsモデルを.pb形式に変換
- (8/9)ファイル名を、yolo-v2-tiny-voc.pb から、tiny-yolo-voc-graph.pbに変更
- (9/9 darkflow/built\_graph/プロジェクト名 フォルダを作成し、pbモデルをここに移動



# .weightsファイル削除 darknet-rm\_100weights.sh

#### Purpose:

- ディスク容量削減のために、100回ごとに生成した.weightsファイルを 削除する
- 1000回ごとの .weightsファイルは削除しない

## • Usage:

- \$./darknet-rm\_100weights.sh <モデル名>
- 例
- \$ cd ../darknet
- \$ ./darknet-rm\_100weights.sh pp4

### **Android Studio**

- Android Studio
  - 同期
  - ビルド
  - Build Variant をdebugにし、Build~Buils Apk(s)
    - G:\footnote{\text{Android}\footnote{\text{Project}\footnote{\text{garbage}\
  - Build Variant をreleaseにし、Build~Buils Apk(s)
    - G:\footnote{\text{Android}\footnote{\text{Project}\footnote{\text{garbage}\
  - Build Variant をreleaseにし、Build~Generate Signed Apk
    - G:¥Android¥Project¥garbage¥release¥garbage-release.apk ができる
  - スマホをPCにつないで、Run 実行

## weights ファイル保存間隔の変更方法

- http://demura.net/misc/14592.html
- 3. ネットワークのウェイトを保存する間隔を変更
- ~/src/darknet/examples/detector.cでは、ネットワークのウェイトを保存する間隔は138行目で次のようになっている
- つまり、学習回数が1000回未満のときは100回毎に保存し、それ以降は 10,000回毎に保存する
- なお、ウェイトはデータ設定ファイルでしたディレクトリbackupに保存される
- if (i%10000==0 || (i < 1000 && i%100 == 0)) { // これを10,000回までは 1000回毎にも保存したければ次のように変更する
- if (i%10000==0 | | (i <= 1000 && i%100 == 0) | | (i <=10000 && i % 1000 ==0)) {